

ホームページ http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスを変更された方は利根川さんに連絡して下さい：GWT00287@biglobe.ne.jp

幾久会（4期）45周年同期会

4期（昭和40年卒）平塚 征英

第4期（S40卒）は卒業時には19人だったが、今年3月に久保田信昭君が亡くなり、以前から連絡が取れなかった伊勢と二人が欠けて17名になってしまった。

幾久会45周年同期会は、伊豆熱川温泉ホテルセタスロイヤルで平成22年10月5日に開催した。首都圏で集まるのは、新橋亭の新年会と有志数人が集まる位で、東北以外での同期会は初めてだった。山から海になったのも初めて。

同期会は、10周年の泉ヶ岳、20周年の秋保温泉、25周年の宮城蔵王、30周年の作並温泉、35周年の鎌先温泉、40周年の須川温泉、ワングル創立50周年に合わせた43周年の上ノ山温泉と今回で8回目であった。皆勤賞は八木一人だけ。参加者は、司会役の秋葉が前日にキャンセルとなり、及川・小原・島崎・白井・関川・竹井・野村・平塚・緑川・八木の10名となった。

ホテルはテレビドラマ細腕繁盛記にゆかりがあるとかだったが、名前のように洋風のホテルで、大露天風呂の他に温水プールもあるようだった。関川と二人でチェックインタイム15時前にホテルに着くと、伊東からの白井が既に来ており、小原の車があり自転車でどこか走っているようだった。

宴会前・二次会用の酒を近くの酒屋で買って帰ると、既に数人が到着しており、それからは、温泉に入り、缶ビールを飲みながらの歓談となった。

全員の記念写真を撮ってから、平塚の司会で宴会が始まった。最初に久保田信昭君と同じ下宿だった関川から故人のエピソードが紹介され、皆で黙祷をささげた。

今回は伊豆海岸の美味しい魚料理を楽しもうと少し高めのコースを選んだ。アワビの踊焼き、金目鯛、伊勢海老など、年金生活者には少々ゼイタクな料理を堪能した。

近況報告では、年相応の病気・怪我、健康、趣味、マゴの話など色々あった。骨折治療のチタンのボルト・フルートや奥様が短歌集を出すこと、おマゴさんのこと、森林インストラクターや前立腺ガンのこと、遺言状や八戸のこと、アルゼンチンへ恩師を訪ねイグアスの滝にも行ったこと、リウマチ博士で明日は歩けるか？30歳までは内からの病でそれ以後は怪我・クマにかじられたこと、一応は高血圧もある・野菜作っていること、108も叩く大病？をしたこと、γGTPが1200にもなったこと、等々だった。2次会は幹事部屋で持込みの酒で。色々とお話ははずみ、明日の観光があるもののお開きは23時近かった。

次回は、幹事は野村で・2年後・九州で集まろうと決まった。それにしても皆さ



んの酒量が減ったことは確かなようで、ノンベエ幹事が準備した酒はかなり余り、これが翌日の昼飯代に変わった次第。

二日目は大室山と城ヶ崎海岸の観光で、天城連山の一人歩きを楽しむ島崎と、車で帰る小原を除く8人は、電車と路線バスを利用してのんびり歩いた。

大室山は標高581mの噴火火山で、丁度お椀を逆さまにしたような美しい姿の山だ。歩いての登山は禁止なので、リフトを利用して頂上まで約5分だった。頂上のお鉢回りは約20分で、遠足の小学生や中国の観光客が結構沢山来ていた。

素晴らしい好天に恵まれ、頂上からは伊豆の海や天城連山などが眺められた。残念ながら富士山は霞んでよく見えなかった。

予定よりかなり早かったので、昼食前に城ヶ崎海岸へ先に行く事とし、路線バスで伊豆海洋公園まで行った。門脇吊り橋までは、遊歩道で約20分とのことだったが、標準的な時間ではキツイと感じる年代になったことを実感した。城ヶ崎海岸は絶壁が連なり、深く入りこんだ岩礁、岬から岬へ続く眺めは素晴らしかった。関川はここでも皆さんの荷物当番をやってくれた。

昼食は伊豆高原駅ビルの金目鯛が人気の食堂で、ゼイタクな食事の総仕上げを行った。伊東駅で実家へ帰る白井と別れ、小田原駅で次の再会を約束して解散となった。



七期 同期会報告

7期（昭和43年卒）上田 俊朗

7月2日（金）と3日（土）の二日間、北海道登別市で同期会を開催。参加者は、以下のとおり、14名とその夫人二人を加え16名であった。

石川誠之、大釜寛修、大木芳正、大山幸則、金子清敏、国岡徹郎、同夫人、高橋直樹、手戸雅巳、真尾征雄、藤森英和、村山貞一、矢崎太造、山口正雄、上田俊朗、同夫人

遠方の北海道での同期会なので、2日を前夜祭とし、3日を本番にと考えて案内を出したが、二人は3日に用事があって帰ることになる事から、予定を変え、2日を本番、3日を「後の祭」とした。これ以外に参加を表明していた菊谷清氏は奥さんの怪我で、また原三郎氏は本人の怪我で参加がかなわなかった。

7月2日 三々五々レンタカー、JR、高速バス等で登別市内の会場ホテル平安に集合。このホテルでの夕食は地元の魚介類、とりわけ毛蟹やえび、ホッキ貝そして白老の和牛のステーキなど採算度外視(?)で対応。菊谷氏からの日本酒の差し入れを飲みながら近況報告をし、遅くまで歓談。

7月3日 大山・真尾両氏と別れ、その他はゴルフ、ワンデリングそれに車で観光の三班に分かれて行動。ゴルフは登別カントリークラブで、ワンデリングはオロフレ岳へ、観光組は洞爺湖・有珠山火口・室蘭の鉄工房などを回り北海道の夏を満喫。夕方登別温泉の登別グランドホテルへ投宿。名湯に入り、北海道の冷えたビールを飲み、また夜はホテル自慢の料理に舌鼓を打ち、満足満足。

7月4日 小雨の中、登別温泉地獄谷を散策し、それぞれ高速バスやレンタカーで千歳空港へ出発。金子・村山両氏は支笏湖経由で札幌に出、その後空港へ。お疲れ様でした。

遠方の北海道での開催と言うことで参加者が何人になるか心配な面があったが、ありがたいこと



に、思いのほか集まってくれた。ほとんどが現役を引退していることと、早めに案内が出来たことから各人割安航空券の手配が出来たためだろう。来年は山形の大山氏が幹事となって庄内地方で開催予定になっている。

8期・9期合同山行 今年懐かしの吾妻小舎と東吾妻山へ

8期（昭和44年卒）小笠原 弘三

もう年の瀬の今では今夏のすごかった猛暑も遠い話に思われる…、恒例の山行は9月4日・5日、総勢17名で賑々しくまた愉快に行われた。参加者は伊藤健/千代、前田夫妻、相原夫妻、根岸夫妻、富川夫妻、片野夫妻、渡辺、中里、川田、原田そして小笠原。

本隊は福島駅西口に11時半に集合した。川田君は大きなトロ箱を2個ぶら下げてやって来た。川田君はおよそ山行とは思えない普段着のいでたちで、ひやかして聞いてみると、履いているのは通勤革靴ではなくゴルフシューズだった。皆それぞれ好みの弁当を買って、吾妻スカイラインへ出発！！

スカイラインのゲート付近の眺望のよい所で昼食。猛烈な暑さの福島駅にくらべると、高度が高くなった分少し暑さは和らぐ。ここで相原夫妻が合流し、クルマは浄土平・吾妻小舎へ。

吾妻小舎はたぶん現役以来だから、およそ40年ぶりだろうか。クルマはするすると傍らの駐車場に止める。松の巨木を抱え込んだ古びた味わいのある小舎に懐かしくそして感慨を覚えると同時に、ずいぶんと気軽に来ることができるようになったと驚き、そしてこんなに便利になっても古いままの佇まいにうれしくなった！

荷物を整理していると遅れた富川夫妻も到着し、さっそく庭先で宴会となった。川田君はおもむろにトロ箱を開けると、ぎっしりと霜降りの馬刺しが入っている。この辺りになるともう気温は快適で、にんにくをつけて食べる八戸名産の馬刺しはとろりとして美味、ビールは旨いし、辺りは高山の景観がそのまま、奥さんたちの話しもはずんでOB山行ならではの楽しさだ。

小舎の宿泊は他に大阪からの一人だけで、私たちの貸切り状態だった。夕食はそれなりに盛り上がり、それから涼しい夜気の中満天の星空を見たり、ふもとの温泉に行ったりで、吾妻小舎の夜は更ける…

5日7：15吾妻小舎を出発。吾妻小富士は前日に登ったので、今日は東吾妻を目指す。兎平～酢ガ平～鎌沼、鎌沼の水辺の道を歩いても、背後の一切教山からもくもく上がる噴煙の亜硫酸ガスの臭いがする。健脚の相原夫妻は一切教山を往復して谷地平で本隊に合流、それにしても元気で仲の良い夫婦だ！

姥ヶ原十字路を過ぎ湿原の木道を辿る。樹林帯の道は木々の日陰で暑さは和らぐもののきつい登りが続く。展望のきかない滑りやすい道でも、女性陣（奥さんたち）の明るい会話に励まされながら1時間ほどで山頂へ。雲ひとつ無い猛暑の夏、遮るものがない東吾妻山からは、北には吾妻連峰の主脈稜線、南には安達太良、磐梯山そして那須、日光尾瀬方面も望めて眺望は抜群だ！磐梯山の左には猪苗代湖が広がり、右には猫魔ヶ岳や桧原湖、秋元湖そして遠くには少し雲が湧く中に男体山が見える。

ここで昼食、小屋の大きな^{▲▲}には鮭と漬物が付いていた。みんなのリュックからは胡瓜の漬物や松前漬、そしてデザートは梨やリンゴが出てくる。こうして恒例の山行は今年も楽しくできました。



吾妻小舎で八戸名産馬刺しに舌鼓



鎌沼の前で勢ぞろい（鎌沼と一切経山）

11期（昭和47年卒）・還暦同期会

11期（昭和47年卒）鈴木 元昭

4月25日、11期全員が伊豆に集まった。三菱瓦斯化学の「やんも倶楽部」に全員集合である。宿は瀟洒な造り。少人数しか泊めない贅沢な宿である。手配してくれた仁藤に感謝。当日の昼、品川駅近くの日立金属・高輪和彊館で、一年先輩の「藤田さんと騒ぐ会」に出席、その足で、伊豆に向かった。

卒業後、全員が集まったのは、初めてではないかと思う。みんなが集まるのは、結婚式（もちろん俺たちの）くらいのもんだったから、30年逢っていない仲間もいる。なんとなくぎこちない挨拶、「やあ」「いま、何してる？」から話が始まる。

大学を出て三十余年、全員還暦を迎えた。企業で、自営で、官で頑張り、子供を育て、一区切りついたところは共通している。風呂に入り、夕食を食べ、だんだんと昔の話が出てくる。夕食を切り上げ、部屋で話し込むうちに、時があつという間に過ぎていった。

三十余年、それぞれが歩いてきた「人生」が語られる。ひとりひとりが話し始める。訥々と、あるいは華麗に、あるいは恥らいながら、あるいは面白おかしく。

それぞれの人生を、お互いに確認し合い、みんな壮絶な時間を過ごしてきたんだなあ、と頷きあう。とてもよい時間を過ごした。

写真は、30年前の我らと、現在の我らである。11期は、全員「長男」である。



21・22期 夏合宿（恋ノ岐川 —鉄砲水の恐怖—）

22期（昭和58年卒）手塚 和彦

今年は沢の事故が新聞を賑わせた。秩父山系ブドウ沢でのヘリコプター墜落と記者遭難の事故、日高の沢での東京理科大生遭難事故など、山に縁のない人々にも“沢登り”という言葉がインプットされた。しかも2つの遭難がいずれも沢の増水で流された事故であったことから“沢登り”と“流される”がペアとなって人々の記憶に残ることとなった。我々も一歩間違えば、この夏もう一つの大きな沢の事故の（それも中高年パーティの）当事者として世間を賑わせたかもしれない。TUWVに入部以来30年近く仲間と沢登りをしているが、初めて「鉄砲水」の怖さを目の当たりにした。

8/6（金） 小出駅前のへぎ蕎麦で腹ごしらえをし、タクシーで恋ノ岐橋へ。奥只見の山々は真夏の緑に覆われ、空は青く絶好の沢日和に思えた。企画書では恋ノ岐橋で一泊の予定であるが、まだまだ日が高いのではやる気持ちを抑えられない。沢筋の遙か奥の空が黒い雲に覆われているのが気になるが、行けるところまで行こうと予定を変更して入谷。前回来たのは四半世紀くらい前のこと。ほとんど記憶が残っていないのにもかかわらず、なぜか懐かしい。こんなに水多かったかなと思いながら遡行。最初のゴルジュ帯を抜けて右から枝沢が入るところに2段5mの滝。恒例（高齢？）のお見合い写

真に興じる。

手塚の次に千田さんが滝を背に立った時のこと、ファインダー越しに見る落ち口の水位が見る見る上がってくる。そのあまりに急激な変化に、ただ事ではない恐怖を感じ、言葉にならない大声を上げて逃げる。ザックをつかんで枝沢を駆け上がる。振り返るとものすごい勢いの濁流が吠えるように滝を覆い隠している。その間わずかに20秒程。気が動転している中で、この枝沢も同じように濁流が下ってくるのではないかと、木の枝をつかんで右岸の高台に上がる。木々の間から覗くと、恋ノ岐川は一面、ココア色の濁流だ。一息ついて辺りを見回すと、滝を背にして最も出遅れたはずの千田さんがなぜか一番高いところまで上がっている。

高台に平地を見つけ、藪を踏み倒してテントを張る。横になると様々な思いが湧いてくる。これが鉄砲水というやつか。我々はカッパすら着ていないが、上流では激しい雷雨だったのだろう。写真を撮らずに滝に取り付いていたらどうなっていたのだろうか。枝沢のない対岸を偵察していたら・・・。枝沢がなかったら・・・。ゴルジュ帯だったら・・・。怖い想像がぐるぐるする中で、無事だった幸運を噛み締めて眠りにつく。

8/7 (土) 朝は何もなかったかのように水が引いている。頭の上は青空。しかし、鉄砲水の後遺症でアラ50の士気は上がらない。今日も上流で雷雨があるかもしれないとの思いが頭を過ぎるが、午前中にオホコ沢出合いまで行けば大丈夫と5時に出発する。オホコ沢出合までは大きな釜を持つ滝や快適に登れる小滝が続く。花崗岩の上の水が静かに流れるナメ床には心が洗われる。大高巻きの下降でザイルを出して時間を取られるが、予定の12時にはオホコ沢出合いに着く。オホコ沢出合の左岸の高台にテントを張る。

案の定この日も強い夕立。拾い集めた流木はどれも芯まで濡れていて火が熾らない。皆で小さなテントに入って背中を丸めて酒を飲む。「鉄砲水」が頭を離れない。翌日は恋ノ岐源流をやめ、オホコ沢の初遡行に挑戦することを決めて眠りにつく。

8/8 (日) 朝はまずまずの天気。迷わずオホコ沢に入る。恋ノ岐川本流に比べると沢幅も狭く水量も少なくなるが、意外と滝が多くフリークライムを楽しめる。二口の沢に雰囲気似ている。沢を最後まで詰めると台倉山北西コルの水場に出る。遡行タイムは約3時間。エスケープルートとしても使える沢である。

ザックを置いて平ヶ岳に向かう。池ノ岳から眺める平ヶ岳は今回も穏やかで優しい。その風景に満足し、玉子石の無事な姿だけを確認して下山の途につく。それにしても20年前と比べて平ヶ岳周辺に登山者が多いことには驚かされる。その多くは玉子石手前で北へ折れて下っていく皇太子登山道の利用者だ。身近になった平ヶ岳。もう秘境とは呼べない。鷹ノ巣尾根の下りはあいかわらず長くていやらしい。沢から上がった後ではやたらと重く感じられるザックにうんざりしながらひたすら下る。最後の一夜はテントをやめて清四郎小屋の布団で寝ることにする。露天風呂で3日間の疲れと緊張を洗い流し、ビールで乾杯。至福のひとつ。今年の夏合宿も無事終了。

山行が終わっても「鉄砲水」の衝撃はなかなか収



1分前 ▼



20秒前 ▼



まらず、しきりと反省してみるがどうしても「こうすればよかった」という解答にたどり着けない。沢筋の奥に真っ黒な空を見たときに、入谷しない英断をすべきだったのだろう。しかし、それでも取まらない。その場合、おそらく我々は暇をもてあまして釣りに出かけたに違いない。エッセン長の石井さんと手伝いの石川、手塚はしばらくして橋の上に戻ってくるが、きっと千田さんだけは深く谷を分け入っている。滝つぼで一心不乱にフライを振っているときに鉄砲水が押し寄せたに違いないのである。帰らぬ千田さんを心配しながら、橋の下の濁流を覗いて呆然とする3人。そんなシーンばかりが浮かんでくる。幸運に感謝し、もう沢は潮時かと思いながら新幹線で帰路に着いた。

【行動記録】

日程：2010/8/6（金）～8/9（月）

メンバー：石井篤、千田敏之、(21期)、石川勤、手塚和彦（22期）

1日目：12:00小出～（タクシー）～13:35恋ノ岐橋～14:45右からの一本目枝沢出会い（C800）、鉄砲水に遭遇、高台にビバーク（泊）

2日目：5:05 C800～6:25清水沢出会い～12:10オホコ沢出合（泊）

3日目：5:55オホコ沢出合～8:00オホコ沢源頭～10:30玉子石～台倉山～16:20清四郎小屋（泊）

4日目：清四郎小屋～（バス）～尾瀬口～（船）～奥只見ダム～（バス）～浦佐

【ブレ山行】

奥多摩トレール（4/10）、雲取山（5/15-16）、真名井沢（6/6）、大滝沢スマキ嵐沢（7/25）

筑波山行&北茨城アンコウ鍋ツアー

26期（昭和62年卒）伊田 浩之

26期は12月4日（土）、筑波山（877メートル）に登った。参加したのは11人中6人（伊田、北村、佐藤、長谷川、平田、森）。3日早朝の大雨から一変した快晴。さすが、関東平野に屹立するだけ名山だけあって、山頂からは新雪を抱いた富士山や浅間山、東京スカイツリーも遠望できた。

われわれは1991年からほぼ毎年山行を重ねてきたが、今年は伊田が今年6月に心筋梗塞で入院（8日間）したため計画立案が遅れた。しかも、去年は11月上旬に鳥海山を目指したが、強烈な風雪のため登頂を断念した経験から、「初冬でも絶対登れる山」に決まった。

集合は午前7時45分、つくばエクスプレスの終点「つくば駅」。ここからシャトルバスが登山口まで30分ごとに出発する。少し早めに到着した伊田は、始発（午前8時発）のバスに乗って待っていたが、北村・長谷川・平田が来ない。携帯に電話すると、「4人でタクシーに乗ることにした」と北村が言う。慌ててバスを降りる。タクシーに登山口までの目安を聞くと8000円ぐらいだとか。バス（1人850円）のほうが安い、と大慌てで再度バスに乗りこむ。混んでいたが、なんとか座ることが出来た。登山口「つつじヶ岡」までは、約50分の道のりである。大笑いのエピソードはきりがないが、紙幅の都合もあるので省かせていただく。

つつじヶ岡からは良く踏まれた尾根を登る。コースタイム80分のところを約60分で女体山山頂に着く。子ども連れやカップルなども多い。首を痛めたため、ケーブルカーを利用した森とはここで合流、相耳峰の男体山（871メートル）に向かう。女体山に比べると、コンクリートで固められた山頂は少し味いいかける。ケーブルカー終点があるコルに戻ったところで、やはり体調不良で登山を見合わせた佐藤と合



流する。

(つつじヶ岡 9:00—9:30 弁慶茶屋跡 9:40—10:07 女体山 10:15—10:30 コル—
10:40 男体山 10:45—10:54 コル)

ところで、冬の茨城といえば、鮫鯨鍋を食したい。大洗近辺も考えたが、時間はあるし土日の高速料金は安いので、北茨城市・平潟港まで足を伸ばした。掛け流しの天然温泉、新鮮な魚介類に大満足だった。ちなみにこれまでの山行は次のとおり。

91年火打岳▼92年西穂高岳▼93年木曾駒ヶ岳▼94年白山(雨で登らず)▼95年御岳▼96年八ヶ岳▼97年剣岳(北ア)▼98年天飾山▼99年焼岳(台風で西穂山荘まで)▼00年奥秩父・金峰山▼01年白馬岳▼02年甲斐駒(雨のため仙水小屋まで)▼03年巻機山▼04年平ヶ岳▼05年・06年休み▼07年二口(TUWV卒業20年)▼08年蔵王山、泉ヶ岳(TUWV50年記念山行)▼09年鳥海山(風雪のため稜線間際で撤退)▼10年筑波山

TUWV45期 2度目の同期山行開催！【2010年9月18日・19日 磐梯山にて】

45期(平成18年卒)佐藤 賢一

雨宮俊、草野駿一、佐藤賢一、多田忠義、長井千里、浜本洋、平田弘一郎 + ゲスト3名

昨年も開催した45期の同期山行だが、年に1回は全員で山へ・・・ということで、今年も開催することになった。今年は、「同期に限らず、(例えば家族や親友など)連れて行きたい人がいれば大歓迎！」というコンセプトのもとでメンツを募った所、TUWVのみならず、浜ちゃんの奥さんや大学の同級生をはじめとする3名のスペシャルゲストを迎えることができ、総勢10名での開催となった。

今年の開催場所は、「磐梯山」。秋田・宮城・福島・新潟・栃木と、今の45期の居場所を考えると、やはり福島県あたりが丁度中間点となるため、昨年の「吾妻連峰」同様、福島県での開催となった。



弘法清水小屋にて

1. 磐梯山登山

9月18日、裏磐梯スキー場に直接集合。定刻通りの集合にはならなかったが、誰しものがこうなることは予想していたと思うので全く気にせず準備を開始。やや高級なメーカーのザック、キャップ、山ガール風の服装などなど、装備に時代の流れを感じさせる人もいれば、変わらずワー〇マンの作業ズボン、ブルゾン、上下で2000円!のまま時が止まっている人もいて、それぞれ収入があるとはいえ、お金の使いどころの違いを実感させられる。

コース自体は、「裏磐梯スキー場～中の湯跡地～ピーク～天狗岩～スキー場」と反時計回りにリングするシンプルなものであったが、天候にも恵まれ、麓に広がる大小の湖や火山特有の荒々しい山容、日本庭園のような平坦地を満喫できる気持ちのいい山行となった。

久々の山行で、下界では交流はあっても、一緒に山を登るのは初めて…という間柄の人たちも多く、みんな思い思いに楽しめたと思う。

2. 温泉～夜の部

今年は夜の部の会場としてコテージを使用した。筆者は初めてコテージを利用したのだが、調理器具やバーベキュースペース完備と申し分ない環境。キャンプ場よりは若干お金がかかるが、相応の設備が揃っている印象。

温泉や買出しは、某研究室の巡検会場ということで土地に明るい多田が中心となって滞りなく済ませ、さっさとコテージに戻り、バーベキューの準備にとりかかる。火起こし、食材切り、荷物の搬送と、誰が何をやるのかは相談せずとも勝手に分担されるのが、まさに、長年培ってきたチームワークの賜物である。

同期山行の醍醐味ともいえる夜の宴では、誕生日を迎えたばかりの長井のお祝いをしたり、山中でよく歌った歌を歌ってみたりと、10人で盛り上がった。今年は、結婚が決まった人、新婚生活を謳歌している人、夢や目標の実現に邁進している人、それぞれ聞きたい話がたくさんあったはずなのだが、疲れのせいか酔いが回るのも早く、深い近況報告はあまりできなかった（無念・・・）。しかしながら、久々に同期全員で同じ時間を共有できたことが何よりの思い出となったのは間違いないと思う。ゲストのみんなが置いてけぼりを食らっていないか心配だったが、それなりにこの雰囲気を楽しんでもらえたと思っている。

3. 最後に

春先から動き出した昨年と異なり、今年は1ヶ月前に動き出したにも拘わらず、7人全員が集まったことは、もしかしたら奇跡かもしれない。何かと「毎年恒例」が好きな筆者は、できれば同期山行も毎年開催したいと考えているのだが、今後全員が集まって山に行ける年がどれだけあるか…。これから家族が増えたり、居場所が変わったりして、全員が集まらないこともあるかもしれないが、「今年も同期山行の季節が近づいてきたな…」と、ふと思い出せるようなイベントにできることを目標に、来年もまた開催したいと思っている。

昨年の会報の記事と同じになるが、企画段階から当日の行動までいろいろと提案してくれた45期のみんなと、部外から参加してくれた3名のゲストのみなさんに感謝したいと思う。また来年もやりましょう！！

ドキッ☆大雪山探検隊!!ポロリもあるよ♡パーティ夏合宿報告書

主将 3年 御子柴 駿

<期日>2010年8月9日(月)~14日(土)5泊6日(正規6泊7日予備2日スライドなし)

<メンバー> 3年 御子柴 駿、大石 慶也、加藤 丈晴、鎌田 健太郎、桑原 里、船田 千城、三浦 雅考、吉森 央

8月6日(金) (仙台→八戸)

仙台駅集合。断髮式から執り行なわれたが、警備員から再三怒られる。冴えない一発芸を披露して、やってしまった感しかない。

8月7日(土) (八戸→札幌)

去年に続くフェリーアプローチだ。各自思い思いの時間を過ごす。札幌にてビアガーデン食い収め

8月8日(日) (札幌→十勝岳温泉)

十勝岳温泉で最後の風呂を満喫していると、カラスに荷物が荒らされていた。無念なり。

8月9日(月) 天候 曇りのち晴れ(十勝岳温泉→美瑛富士避難小屋)

稜線まで400m弱の急斜だったが、プレでクソみたいに長い急登を幾千と登ってきた我々の敵ではない。稜線上はガスの中で風もあり寒かった。十勝岳の登り最中から、ガスも晴れて快晴となった。流石百名山ということもあってか十勝岳ピークは少し混雑していた。そこからはいかにも最近噴火しましたって感じの火山ザレ帯。美瑛岳からまとまった300mダウンだが、かなり急斜で今思えば合宿中最も疲れた下りであった。美瑛富士避難小屋についてみると、ここで三浦がゲロを2つ忘れてきたことが発覚。隠しボッカのパン缶と桃缶を空けて、それで味噌汁を飲むこととなった。

8月10日(火) 天候 晴れ時々曇り(美瑛富士避難小屋→双子池キャンプ指定地)

あまりに天気がよく気持ちのいい景色で、コースタイムもド余裕なので、ベベツ岳お見合い写真を撮る。オプタテシケ山からは怒涛の600mダウンだったが、なかなか歩きやすく昨日の美瑛岳からの下りよりも疲れなかった印象だった。テン場の双子池横を目指す。10時台にテン場に到着して、やることもないので寝ようと思ったが、とにかく日差しが暑い。

8月11日(水) 天候:晴れのち雨(双子池キャンプ指定地→南沼キャンプ指定地)

朝日に照らされたオプタテシケ山が美しかった。この日は核心日というので、みな思い思いの方法で鉢巻を巻き、円陣を組んで出発。情報では歩きにくそうな山道であったが、刈払いが入ったのかペースがかなり早い。本日の大勝利を確信し、ずんずん進んでいく。晴れていて見通しはかなり効くが、ひたすら原野しか見えない。ツリガネ山でLを取っていたが、出発間際に天候が急激に悪化。さっき

までの晴れが嘘のように雨風は次第に強くなり、暴風雨みたくなってきた。雨風でもものすごく寒い。三川台からはまっ平らなお花畑で晴れたら気持ちいいと思うが、この時は直に風があたり、山道は沼化していたので不快でしかない。黙々とひたすら歩き続けた。

8月12日(木) 天候:雨(南沼キャンプ指定地→忠別岳避難小屋)

天候は相変わらずだったが、今夜から翌日にかけて台風が通過しそうだったので停滞するにしても小屋のあるところまでということで、朝一で出発。昨日よりは、多少風雨が弱まった印象だ。本合宿最大の目玉だと思っていたトムラウシ山は、視界が全くないので全然面白く無い。化雲岳から五色岳までは湿原の中の木道とハイマツ帯の山道の繰り返しだが、湿原からあふれた水が全部山道に流れこんで次の湿原まで沢のごとく流れていた。忠別岳避難小屋に入ると停滞していた高知大WVがいた。毎日午前中テン場着で、昼間から酒を飲んでいたので酒が足りない問題が深刻になりつつあった。みんなしてハラヘリ病にかかっていた。やることもないので6時就寝。

8月13日(金) 天候:雨のち晴れ(忠別岳避難小屋→白雲岳避難小屋)

心配された台風だが、小屋の外は無風の小雨で、行動に支障なしとして出発。稜線に出ると多少風が強くなったが、これまでの2日間に比べるとだいぶマシなレベル。稜線上起伏の少ない同じような景色で変化に乏しい山道。ひたすら黙々と歩き続ける。視界真っ白で何も見えない。白雲岳避難小屋までの最後の登り区間で3日ぶりに太陽神が降臨する。一同テンションダダ上がり状態になる。あまりにも早くテン場に到着したのでテン場飛ばしを考えるが、あまり賛同は得られず今日はゆっくりここで休むことにする。酒も足りなかったなのでこの日も早めに就寝。

8月14日 天候:快晴(白雲岳避難小屋→層雲峡→旭川)

かなり早めのペースで歩いていたが、後ろは喋りながら余裕で付いてくるのでそのままのペースで行ったらあっという間に白雲岳まで到着。このペースなら今日中に下山できるのではと思い、白雲岳で今日中下山を目指すと言葉を吐くと歓声が上がる。スカッ晴れで今まで見たことのないようなすごい景色だったのでここからはひたすら平らで快適に飛ばす。本合宿3つ目の百名山旭岳は、ロープウェーで登ってきた人でごった返していた。景色もいいのでお見合い写真を撮ろうという話になったが、何を考えているのか衆人環視の下で服を脱ぎだす男たち…。黒岳からは、お盆真っ盛りのために層雲峡から入山した下界装備の一般人親子連れがゴミのようにいた。ここからは一般人をひたすら追い抜き追い抜く。一般人がリフトに乗るのを横目に登山道を下る。長かった夏合宿、そしておそらく人生最後の長期合宿も幕を閉じて感慨深いものがある。



黒岳ピークにて

旭川到着後、中華料理食べ飲み放題の店にて、反省会とした。翌朝駅前でパーティの解散を宣言して、ドキッ☆大雪山探検隊!!ポロリもあるよ♡ パーティは無事成功裏に終了となった。

地底の世界

4期(昭和40年卒) 大東警司こと小原佑一

毎年、その立派な姿を遠くから見ているだけだったが、ついにこの夏、山頂の小屋にいる三日月君に会ってみたいと何十年ぶりで蓼科山に登った。

はじめて蓼科に登ったのは小学生の時、その時は時間切れで途中から引き返し、その次はワングル現役時代、南アルプスの合宿終了後、蓼科を出発点として八ヶ岳を縦走、清里に下りて信州峠を抜けて金峰から秩父を縦走し、雲取から当時の氷川駅(今の奥多摩)まで・・・

昔を思い出しながら蓼科の山頂へ、岩だらけでグランドのように広くて平らな山頂の片隅で風雨に

さらされた御幣の付いた荒縄を見つけた。何となく意味ありげで神秘的な空間。

三日月君に聞くと、ここには古くからの言い伝えがあって、この穴は浅間山の麓の池につながっていて、お姫様の話があるとか・・・

帰って調べてみると、諏訪地方に伝わる諏訪明神の「本地」を語る「地底の国／遊井万国」の入口であることが判った。

話は近江の国、甲賀の地頭、甲賀三郎の妻、春日姫が伊吹山の天狗にさらわれ、甲賀三郎は諸国を探しまわって、この蓼科山山頂の穴にたどり着いた。穴の底で春日姫を見つけ救出するが兄に春日姫を奪われ、三郎は穴の中に取り残される。穴の底には地上と全く同じように農耕や狩猟が行われている地底の世界、遊井万国があった。三郎はこの地底の国を遍歴し、地底の国の女性と結婚して9年余地底で生活。やはり地上が恋しくなってきたところが浅間山の山麓の池、西大沼。なんと地上では300年近く経っていた。三郎は一時大蛇に変身したりして諏訪湖の畔にたどり着く。三郎は諏訪明神の上社、春日姫は下社に祀れ、冬になると三郎が諏訪湖を渡って下社から下社に向かう。その時、諏訪湖の御渡りが出来るとか・・・

この甲賀三郎の話の他、諏訪湖、蓼科、八ヶ岳界隈にはいろいろと歴史に関わる話題があるよう。いつも気にせず通過している麦草峠や奥蓼科の渋の湯付近には旧石器時代、黒曜石を採取した遺跡があるとか、また蓼科高原では薪を燃やして鉄を取り出す産鉄が行われていた。

耕作放棄された荒れ地を鋤で耕した後、鉄鉱山跡の露天風呂で汗を流し、星空の下、ビールをのみ、酔いつぶれて寝てしまう。こんないい加減でぐうたらな庵の生活もいいものです。



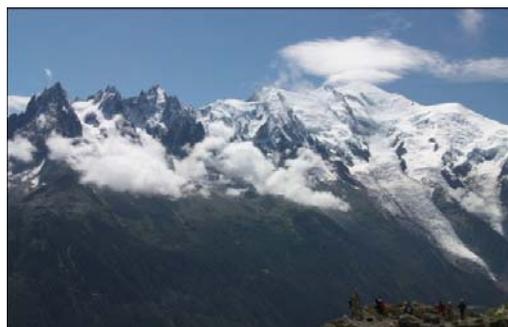
ツール・ド・モンブラン

5期（昭和41年卒）八木 眞介

ツール・ド・モンブランは、モンブラン山群を一周するトレッキングルートである。ツアーではルート中のポイントとなる所を歩き、間を車で繋ぐ形で日数を短縮している。7月から8月にかけて、このトレッキングに参加した。

コースは、シャモニーに入り、初日は足慣らを兼ねてモンブランと反対側の赤い針峰群中の山上湖ラックブランを往復し、翌日から本格的にトレッキングを開始した。1日目、車で南のノートルダム・ド・ラ・ゴルジュに行き、トレッキングを開始、ボンノブの科尔(2329m)を越えてボンノブ小屋へ。2日目、小屋からほぼ真直ぐ東へ下ってシャピューにある山小屋へ。3日目、ここからは北に向かい、谷奥まで車で行き、フランスとイタリアの国境があるセイニュの科尔(2516m)を越えてエリザベッタ小屋へ。4日目、小屋からコンバル湿原(2000m)へ下り、ここから山群と谷を挟んで反対側の尾根に登り、中腹をほぼ水平に北端のシェイクの科尔まで歩き、ロープウェイでイタリア側の小都市クールマイユールへ、というのが前半のルートである。

5日目、午前中にモンブラン山群越えのロープウェイのイタリア側の展望台エルプロネルに登って展望を楽しみ、午後に車で北の谷に入り、2時間弱歩いてエレナ小屋へ。6日目、イタリアとスイスの国境のあるフェレの科尔(2537m)を越え、緑の谷をフリー村へ。7日目、山群の



ラックブランからのモンブラン



グランドジョラスを見ながら歩く

北側を車で回ってトリアンへ、ここから南に向って歩き、スイスとフランスの国境のあるバルムのコル(2191m)へ、コルからロープウェーでトゥールへ。8日目、モンブランと反対の赤い針峰群の中のシェズリー湖(2213m)へ登り、ロープウェーを利用してシャモニーへ下り、モンブラン山群1周を終えた。

宿泊した山小屋は、エリザベッタ小屋が3段のカイコ棚状だった以外は2段ベットスタイルで、比較的快適である。食事は私には比較的好いしく、イタリア側の山小屋は特に良かった。シャワーも全ての小屋で使えたようである。小屋に着いたあと夕食まで時間のあることが多かったのも、いつもビールを飲みながらメンバーが集まって歓談して時間を過ごした。参加者それぞれ個性が強く、楽しい時間であった。山での挨拶は、フランスとスイスではボンジュール、イタリアではボンジョルノと、峠を境にして変わるのも面白い体験であった。

道は、赤い針峰群側以外は比較的ゆるい傾斜で作られており、岩も少なく歩きやすい道である。着替え等の荷物は先送りするので、2日間分の衣類等と当日の弁当だけを持って良し、荷も楽である。

今回は、比較的天候にめぐまれたと言える。赤い針峰群側に登った日、イタリア側のコンバル湿原からの尾根歩き、エルプロネル展望台といった展望を楽しみたい日は全て好天気で、モンブラン山群の景観を堪能した。4回のコル越えの時は山にガスがかかって展望は今一であったが、何回か軽い雨にあった程度であった。今回は7月から8月にかけての期間であったが、ほとんどの場所がみごとなお花畑で、様々な花が咲き乱れる中を歩くというすばらしい気分を味わった。花は日本にあるのに似た花も多いが、アルペンローゼ、ゲンチアンを初め、日本では見られない花も多い。マーモット、アイベックス、シャモアといった動物も見られ、いろいろ楽しめたトレッキングであった。

御嶽山登山

6期(昭和42年卒) 加藤 邦明

御嶽山に関してはブログに紹介文も多く、「御嶽信仰は、初めは修験道の場として栄え、平安・鎌倉・室町時代から御嶽独自の山岳信仰が生まれた。厳しい修行を重ねた道者が集団的に登拝する風習が江戸時代末まで続き、1784年(天明4年)、尾張の行者・覚明(かくめい)によって黒沢口が、1794年(寛政6年)には武蔵国の行者・普寛(ふかん)によって王滝口が一般に開放され、御嶽信仰が全国的な信仰へと拡大していった。御嶽の信仰は、『死後の安住の地を御嶽山と定め、霊魂は童子としてお山に引き取ってもらえる』との山岳信仰として存在していた」とあった。今回は、危険が少なく、かつ最短の田の原から登るコースを選んだ。

2010年(平成22)8月24日に、鎌倉の自宅を出発した。厚木経由、中央自動車道で伊那ICから一般道路に出て、新設間もない権兵衛トンネルを利用して、宮ノ越の木曾義仲館跡を見学した。木曾福島の元橋で右折し王滝村方面へ向かった。御嶽神社里宮にお参りをし、「2万基を超える霊神碑」の林立に驚愕を覚えながら、御嶽高原への道を辿って、本日の宿であるオールドブリックに到着した。

8月25日は田の原駐車場に車を置いて、6:50に登山開始とした。間もなく大黒天、遥拝所が出て来て、ご祈祷の跡も生々しい大江権現で、宿からもらった握り飯の朝食とした。夏山シーズンも終わったのか、すれ違う人、相前後して登る人も少なく、金剛童子、八合目石室、九合目、王滝山頂、剣ヶ峰に10:12に到着した。山頂は人気も少なく、曇で遠望は冴えなかったが、折角来たのだからと、氏名・日付入りのお札を購入した後、お鉢周りをした。



田の原



剣ヶ峰山頂



二の池雪渓

帰りは、王滝山頂(12:50)、八合目(霧が出始めた)、金剛童子、大江権現を經由して、田の原に14:32に戻った。15:00に出発し、国道19号線高速に乗って、次の宿である清里に直行した。清里のホテルに17:45に到着し、早速温泉へドブンとなった。

再び垂直の大岩壁へ (クライミング@ドロミテ)

8期 (昭和44年卒) 佐藤 拓哉・良子

「すご〜い！」・・・ドロミテの中心に位置する小さな村、セルバ・ガルディナに降り立った時の言葉は、2年前と少しも変わらなかった。背後に垂直の岩壁が屏風のように聳えているこの美しい村を再び訪れることができたことに感動を覚えた。

イタリア北部に位置するドロミテとは、長野県に匹敵する広い山域に広がる山の総称であり、垂直の大岩壁や岩塔など石灰岩特有の山容が、「世界で最も美しい山」と言われている。ドロミテの中心地であるコルチナ・ダンペツォは、1956年の冬季オリンピックの回転競技で、猪谷千春がトニー・ザイラーに次いで銀メダルを取ったところであり、日本にとって思い出深いところである。ドロミテの北はオーストリア国境であり、やはりオリンピックが開かれたインスブルックはすぐ近くである。

初日は、セラ山群のNo. 1 & No. 2タワーと呼ばれる岩塔(15ピッチ)を登った。セルバからセラ峠まで車で30分、そこからきれいな草原を20分ほど歩くと、もう取付きである。取付きの辺りの岩の間には、ところどころ可憐なエーデルワイスがまだ咲いていた。このタワーは2年前にも登ったが、今回は別のルートに登った。ほぼ垂直の壁が続く岩塔のクライミングは、開放感があり、気持ちが良い。なんと言っても、しびれるような高度感がたまらない。

二日目はコルチナ・ダンペツォの近くまで遠出し、ファルツァレーゴ峠の近くの山に向かった。岩壁の基部の緩い草原を登っていくと、岩壁のところどころに穴があいている。実は、これは第一次世界大戦の時にオーストリア軍がトンネルを掘って作った地下要塞の窓とのことである。足元の土の中からは、今でも鉄条網の残骸が顔を出している。思わぬ歴史を垣間見ることができた。今日のルートは急峻なカンテであり、下から見上げると鋭いタワーに登っていく感じである。あまりのカッコよさにワクワクしてしまった。峠から見た時は小さい山のように見えたが、周りの山が大きい過ぎるためであり、結構登りごたえのあるルートであった。登り切ったところは、十字架の立つ頂上であった。岩壁の反対側はなだらかな稜線になっており、深い塹壕が延々と掘られており、山全体が要塞になっていた。思わぬところで歴史跡を見ることができ、興味深かった。



三日目は泊まった村の近くのガルディナ峠に車を置き、目的の岩壁まで、景色のいい草原を歩いていった。今日は大きなフェースと凹角の組合せであり、比較的レベルの高いルートであった。特に、最後の垂直の凹角のクラックには手強かった。垂直に近い壁の連続を、谷を挟んで聳えるセラ山群の雄大な岩壁を眺めながらのクライミングは楽しいものであった。登り終わった後、素晴らしい景色を見ながら1時間ほど稜線をハイキングして峠に戻った。

三日目は泊まった村の近くのガルディナ峠に車を置き、目的の岩壁まで、景色のいい草原を歩いていった。今日は大きなフェースと凹角の組合せであり、比較的レベルの高いルートであった。特に、最後の垂直の凹角のクラックには手強かった。垂直に近い壁の連続を、谷を挟んで聳えるセラ山群の雄大な岩壁を眺めながらのクライミングは楽しいものであった。登り終わった後、素晴らしい景色を見ながら1時間ほど稜線をハイキングして峠に戻った。

最後の日は再びファルツァレーゴ峠まで足を伸ばし、今度は二日目と反対側の山に登った。こっちにも要塞跡があり、イタリア軍が作ったものである。峠を挟んで長い間対峙したということであったが、この素晴らしい自然の中でそのようなことが現実にあったとは俄には想像しがたい。日曜日のため多くのパーティが来ていた。今日のルートも人気ルートらしく、何パーティも入っており、ロープを交差させながら、入り乱れてのクライミングとなった。このような登り方は日本ではとても考えられないが、そのお陰で、他のパーティとも話をすることができた。我々が追い越した二人パーティは、

エバラのイタリア工場でポンプを造っているということであり、余計に親近感が湧いた。

今回は自炊のできるアパートタイプのプチホテルに5泊した。木を贅沢に使った部屋が二つとキッチン、広いエントランスホールとバスルームが整い、四人家族がゆったり過ごすことができる快適な部屋であった。玄関ホールにカップが数多く飾ってあったが、オーナーが、ワールドカップのイタリア代表スキーヤー時代に勝ち取ったものようであった。長野オリンピックにはコーチとして来たと言っていたが、今は気のいいただのおじさんになっていた。

富士登山、劔岳、西穂高岳

10期（昭和46年卒）田中 康則

昨年のジャンダルム縦走の余韻が残っているせいか、今年も夏が近づくと、北アルプスなどに行きたい思いに駆られた。

7月の連休である18日（日）、19日（月）は富士登山です。富士山は初めてなので、バスツアーを利用した。富士登山には主要な4つのルートがある。静岡県側の富士宮ルート、須走ルート、御殿場ルートと山梨県側の吉田ルートです。今回はメインルートである吉田ルートから登った。富士スバルラインの五合目から午後2時頃に登山を開始し、午後6時には7合目の東洋館で仮宿泊した。

食事をして仮眠。午後10時過ぎには、頂上での御来光めざして出発。翌19日、午前5時過ぎに頂上着。御来光を見た後、下山組と別れ、お鉢廻りをして、富士山の本当の頂上である劔が峰を往復して下山した。幸、天候に恵まれ素晴らしい富士登山でした。

8月と9月の連休は劔岳登山です。8月は台風の為、劔岳頂上直前で引き返してきたので、9月に再挑戦した。ルートは一般的な別山尾根ルートです。9月18日（土）新宿発、松本経由で信濃大町へ。信濃大町の旅館泊。9月19日（日）は立山黒部アルペンルートで室堂へ。室道ターミナルより遊歩道をたどり、雷鳥平をすぎて、浄土沢を渡る。やがて劔御前小舎の建つ別山乗越に出る。ここから1時間位かけ劔山荘へ下り、本日の宿舎とした。



西穂高岳独標にて



昨年、ジャンダルムを縦走した直後



劔岳頂上にて。雨の中を一人で登山

9月20（月）朝5時、朝食を摂らずに劔岳に登山を開始しようとしたら雨。8月にも登山経験があるので、一人カッパを着て出発。一服劔、前劔は予定通り過ぎた。少し行くと岩峰が現れ、手前で鉄橋を渡り、岩峰に取り付きクサリに沿って右上していく。この辺りから難所が続く。やがてカニのタテバイに。緊張してゆっくり登る。登り終えてしばらく行くと劔岳頂上だ。しばし休憩をして今度は下降路のカニのヨコバイへ。下降路は後ろ向き三点確保で降りなければならない所も多く、やはり難路である。なんとか劔山荘に降りてきたのは午前11時過ぎ。余韻に浸る間もなく同じ道を下山。午後2時過ぎには室道ターミナルに到着。着替

えをして、往路と同じ立山黒部アルペンルート、松本経由で新宿へと帰った。劔岳はやはり北アルプスでも最難関の山のひとつなので充実の登山となった。

10月9日、10日、11日は昨年と同じ西穂高岳登山。9日、10日は冬山の様でしたが、11日（月）は最高の天気、いつまでも下山したくない思いで独標を後にした。

富士登山はバスツアー、劔岳、西穂高岳は単独行。劔岳は複数で登山した方が安全でしょう。

日本山岳耐久レース 50歳の激走

22期（昭和58年卒）西川 雅明

2010年10月10日、日本山岳耐久レース「長谷川恒男CUP」（通称ハセツネ）が開催された。私はこの日を数年前から意識していた。ハセツネは24時間で奥多摩を71km走るレース。私もこれまで何度か会報で書いたことがある。

私がこのレースに参加するのは6回目だ。しかし今年に参加には例年にも増して特別な意味があった。今年私は50歳になった。年代別クラスがランクアップした。うまくやれば年代別で上位に食い込める可能性があったからだ。結果は11時間20分28秒。総合118位／2488人登録、年代別5位／317人登録となった。年代別は6位までが入賞だから私は念願の入賞を果たすことができた。

実は、今回のハセツネでは50歳代に見事に強豪がそろっていた。大会一週間前に届いた名簿を見たところ全国規模の大会で優勝経験をもつ選手が少なくとも8人はいた。

ハセツネ2年連続優勝のMさん、北丹沢や陣馬のトレイルレース常勝のKさん、富士登山競走で優勝したMさん、50代で初めて10時間を切ったUSさん、春のハセツネ30で優勝したYさん、など。

50歳代の順位を予測しているブログには、そうした強豪選手や有名選手の名前が連なっており、無名である私の名などはどこにもなかった。そんな状況だったのでベスト10に入るのがせいぜいかなと一度は弱気になったのだが「どんなビッグネームであっても、この年齢のランナーは皆がベストコンディションで臨めるはずはない。誰か脱落すればチャンスはあるかもしれない」と思い直し、最後まで調整の手を抜かず本番を迎えた。

本番では、かつて出した自己最高の11時間9分を更新しようと最初から飛ばした。途中、雨や霧に悩まされ、多少スピードは落ち、自己記録の更新はならなかったものの上記のタイムでゴールした。案の定、ベテランランナーの何人かは途中でリタイアし、幸運にも入賞を果たせた。

私の入賞が知れわたると、以前50歳代の部で優勝したYさんから嬉しいメールをもらった。「入賞おめでとう。あなたの入賞で来年の激戦がますます面白くなった」——私はまだこれからも記録向上を目指さなくてはならないようだ。

世の中には歳をとっても、ますます精力的に走っている人たちがたくさんいる。私も暫くはそうした人たちを目標にしたいと思っている。



ナマステ・ハネムーン

43期（平成16年卒）金谷 健史

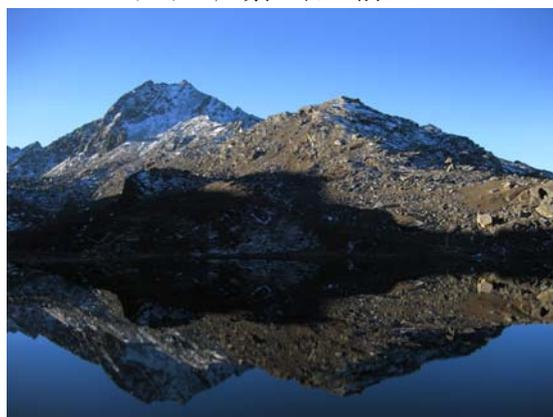
私ごとで恐縮ですが、この春結婚いたしました。となると、当然新婚旅行に行かなければなりません。社会人となった今、大きな顔で長期の休みを取れるのはこのチャンスを置いて他にないからです。せっかくの長期ですから普段行けない所に行こうと決めました。アマゾン川でバタフライ、南極でペン

ギンと相撲、など色々と考えてみたものの、既に旅行ではなく冒険に変わっていると論され、生きて帰って来られる事、それでも達成感が得られる事、という私の希望を兼ね備えたネパール・ヒマラヤトレッキングに行くことにしました。出発は10月。ちょうどネパールが乾季に入り天候が安定している時期です。行き先はネパールの首都カトマンドゥからほど近いランタンヒマラヤ。『世界で最も美しい谷のひとつ』と評される山群です。

韓国インチョン空港を経てカトマンドゥに。そこから街を越えて山腹をバスで10時間。もちろん舗装はされていません。縦揺れ横揺れ斜め揺れ、断崖の斜面を遊園地のアトラクション以上のスリルと、明らかに過剰な乗客を乗せてバスは走ります。道中、日本人が初登頂したマナスルを感慨深く眺めながら、谷底に落ちているバスを意味深く眺めながら、いつの間にかスリル満点バスで熟睡している家内を茫然と眺めながら。登山口となるシャブルベンシに着いてからは本格的に山に入ります。氷河により削られた深い谷を遡ると、徐々に薄暗かった樹林が開け、頂上が雪で覆われた神々しい山々が見え始めてきました。ランタンII峰、ランタンリルン、キムシュン、ガンジャラチュリ。中でも一番格好良かったのは、千丈ヶ岳の様な雄大なカールを持ちながら槍ヶ岳の様に急峻なピークを示すガンチェンポ。赤い夕陽の中でそのカールに刻まれた“ヒマラヤ襷(ひだ)”は深く陰しい影を作り、遠くにあっても存在感を放っていました。その後も、白いヒマラヤの山々が一望できるラウルビナヤク、青空が映えるヒンズー教の聖なる湖ゴサインクンド、数え切れない緑の棚田が斜面を埋め尽くすヘランブー、随所に見られる祭事の黄色い花マリーゴールド、と、まさに五色の祈祷旗タルチョのようにネパールの自然は鮮やかな色で始終我々を楽しませてくれました。

私にとって初めての海外旅行。写真でしか見たことのなかったヒマラヤの風景が目の前に広がっていると、もう勝手に身近な存在に感じてしまい、次はエクスペディションで、という夢すら見るほどでした。トレッキング中の絶景もさることながら、無秩序で雑多ながら活気に満ちたカトマンドゥの街、そして、そこで懸命に生活する人たち、シェルパやポーター、村人や純粋な目をした子供たちとの交流はとても衝撃的で、如何に日本にいた自分が生きていくことに無頓着であったかを感じさせられる良い経験となりました。

3週間も仕事を休み、大満足の帰国後、自然への賛歌と魔除けのために我が家にも祈祷旗タルチョを導入しようとしたのですが、家内にも職場にも白旗しか掲げられませんでした。



近況報告

5期(昭和41年卒)の吉田公平です

小生、昨11月に岩沼に移りました。東京に仮住まいをしたのは都合6年になります。その間もじつは家族は岩沼に居住し単身赴任の形でしたが、今後は講義ある火曜日に東京に参り、木曜日の夕方に帰郷するという形になります。とはいえず土曜日・日曜日に研究会・学会が開催されることが多いので、その際は東京滞在になります。基本的にはホテル住まい。郷里は静かだし空気と水はうまいし野菜は新鮮で安い(東京の半値)満天の星が見えるし時間がゆっくりと流れるで、まあいいかなと思っています。

書物が入りきれないので小屋を新築しました。徐々に整理して臨戦態勢を整えます。半年はかかるでしょう。いよいよ仕上げの時を迎えます。近年、地方自治体に請われて講演に参ることが増えました。大学の講師派遣事業で出張することもあります。傾聴すること、学ぶこと・疑うことの

意味、身体は誰のものか、人権と幸福、地域文化の再発見、先学先人に学ぶことなど、求めと関心に寄せての講演です。おかげで和歌山県を残して全都府県に参上しました。江戸期幕末維新时期明治大正期の儒学者の資料調査を兼ねた行脚でもあります。今後は宮城県仙台藩ゆかりの先学を調査することにも意を注ぎたいと思っています。

段々と漢文をちゃんと読める人が少なくなっていくのは淋しいものです。それだけ人類の知的資源が開発されないままになることが残念です。また写本・自筆本のままに残されているのが圧倒的に多いので読み起こして活字化し、将来世代に贈り物にしたいのですが、お手伝いしてくださる方はいないでしょうか。時間をとられますが、先学が既にここまで深く考えていたのだということが実感できるので、とても楽しい仕事です。世界はざわついていますが、それを透視できる眼力をモノにできるかもしれません。楽しいことを行うことはとても楽しいです。

楽しい人生に乾杯。

8期（昭和44年卒）の相原敬です

50過ぎになってから病後のリハビリを兼ねて山歩きを再会した。その直接のきっかけになったのが、TUWV同期のOB山行で安達太良に行ったことだった。早いものであれから10年以上を経過し、振り返ってみれば夫婦二人だけの気ままな山行がよく続いたものである。ここ数年、山にのめり込んでいる中高年を多く見かけるが、私達も例に漏れずバタバタと今年も40日以上山に入った。いまでもピークハント、稜線歩きを主体に楽しんで充分満足しているが、今年最大の、いやこの10年間における最大の出来事は、この春に同期の拓哉からクライミングの誘いがあったことである。「還暦過ぎたらクライミング」というのが彼の口から出た殺し文句だった。

不安がる相棒を無理やり連れ出して、榛名山の黒岩ゲレンデで岩に挑戦。これには今まで体験したことのない感動と充実感とを覚えた。道具を使う山登りへの憧れもあったし、神経を集中することの快感もあり、繰り返すうちに高所の恐怖心も次第に和らいでいくように思えた。結論は、スリルと達成感に夫婦揃って嵌まってしまったのである。このことは私達の山歩きの幅を格段に広げる効果もあり、あと10年早くやっていたらという後悔さえ湧き上がる思いがした。

拓哉に連れられて、黒岩のあと表妙義の峻険な稜線を二日ばかりで歩き、オギヤーも一緒に軽井沢の高岩にも登った。その後クライミング用具を一気に揃えて、夫婦二人で岩場に出向き確保の練習、懸垂下降などの自力挑戦は新鮮で楽しかった。11月になって再び黒岩に出掛け、拓哉から更なる技術の習得に励んだ。これからどんな展開を見せるのか自分でも楽しみにしているところだが、まだまだ自力でクライミングをするレベルにないので、拓哉様次第ということになりそうです。まあ今後のことはさておき、拓哉には大いに感謝しなければならない一年であった。



22期（昭和58年卒）の手塚和彦です

恒例となったOB夏合宿で25年ぶりに恋ノ岐川を遡行。初めて遭遇した鉄砲水の怖かったこと。詳細は「山行報告」を参照のこと。プレ山行として雲取山、奥多摩真名井沢、大滝沢スマキ嵐沢。職場のハイキング班で鹿島槍・爺ヶ岳。秘かに百名山踏破を狙っているが、今のペースだと80歳を超えそう。よろしくお願ひします。

22期（昭和58年卒）の利根川敏です

社会人になり25年、来年は結婚25周年を迎えるため、人生の節目として「16連休のリフレッシュ休暇」を頂きました。休暇中に異動辞令を受け取るという想定外の出来事もありましたが、...

慌ただしい生活から離れ、有意義な時間を過ごしました。ワンダーフォーゲル(Wandervogel)のルーツはもちろんドイツ、休暇中は渡り鳥の気持ちになって旧東ドイツからチェコを経由しオーストリアアルプスのふもとをまわり、スロバキアからハンガリーまで、夫婦でのんびりと旅をしてきました。



電子メールアドレスの管理も粛々と進めています。今年はメールアドレスの変更が20件ほどと、50周年の準備を行った年に比べると、名簿管理人としても非常に平和な1年でした。これからも、TUWVの電子メールアドレスを管理します。アドレスが変更になりましたら、22期の利根川 (GWT00287@biglobe.ne.jp) まで、ご一報下さい。

訃報

今年3月26日、4期の久保田信昭さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

久保田信昭君の逝去を悼む

4期（昭和40年卒）関川 利男

我々4期19人は平凡ながら一人も欠けていなかったことがささやかな自慢でしたが、久保田信昭君が2010年3月26日、前立腺ガンの為帰らぬ人となりました。68才でした。久保田君は新潟の高田高校出身で工学部機械工学科卒業、荏原製作所に勤務、定年後は荏原工機の取締役工場長の要職を務めていました。

小生（関川）は同じ新潟出身ということで親しくさせていただきました。特に下宿が同じだったこともあって、彼の真面目で優しい人柄に日々接し、教えられることも多く早すぎる別れが残念でなりません。下宿ではワングルを論じたり故郷の話をしたり、思い出はつきません。彼からネクタイの結び方を教えてもらったことや、二人でブルーマウンテンのコーヒーを飲んだこと、そしていつも机に向かって勉強していた姿が懐かしく思い出されます。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます

訃報

今年6月3日、8期の石井良知さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

石井良知君を偲ぶ

8期（昭和44年卒）前田吉彦

同期の石井良知君が今年6月3日に亡くなった。がんに対しても、彼らしく明るく闘ったものの力尽きたとのこと。

卒業後、神戸製鋼を経て神戸大学で教授として活躍中であった。昨年暮に会った時には、酒も飲み、若者の育成方針を熱っぽく語ってくれたばかりであったが。

神戸の町を愛し、六甲山にも家族でしばしば登ったとのこと。その六甲山中腹に眠る石井君を、いつか訪ねてみようと思う。

訃報

今年2月5日、10期の藤田徹さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

藤田君とお別れの報告

10期（昭和46年卒）若佐 則雄

2010年2月5日。10期16人の仲間の一人、藤田 徹君が逝かれました。

昭和23年7月7日、羽後本荘生まれ、秋田高校出身、工学部土木工学科。ワングルでは連盟係。日立造船から新潟鉄工。その後、自営の交通技術コンサルタント。コンクリート軌道についてアジアでは権威者。

奥様の真利子さんと浦和の自然の残る閑静な住宅地に居を構え、二人のお嬢さん、お孫さんに囲まれていました。前年の秋頃には私とも「呑みにいくベエ」などとメールのやり取りもしていました。

その日の直前までは疲れると言いながらも真利子さんと一緒に、あるいは一人で散歩していたそうです。真利子さんからも思いもよらない急逝とお聞きしています。

10期東京在住の仲間でお見送りをしたときは、とてもきれいなすっきりした顔で、まるでコタツの中で昼寝をしているようでした。

その後4月24日に品川で、いつも明るく、酒が好きで、皆を楽にさせてくれた藤田を偲んで、「藤田と騒ぐ会」を催しました。10期の全員、9期の先輩方、11期、12期の後輩の皆さん、高校以来の友人の高橋幹夫君など、多くの友人が駆けつけてくれて、藤田の写真を見ながら、思い出を語る会になりました。

今年（2011年）は10期がワングルを卒業してから40年目。これを記念してマチュピチュに行くことにしています。藤田はこれをとて楽しみにしていました。藤田が持っていたマチュピチュのDVDを真利子さんから預かっています。これを持って、行くつもりです。

遅かれ早かれ、私たちも藤田のところに行きます。花に囲まれたやわらかいテントサイトと、日陰のおいしい水場を探して、待っているといます。あの笑顔で。じゃ、またな。



新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2011年1月28日(金)18:30 (会費は10,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogyal103@jcom.home.ne.jp

<2010年新年会出席者>

(S39)小俣勝男、岡好宗、後藤龍男、佐藤敦、
松木功 (S40)及川捷悦、小原佑一、島崎質、
緑川学 (S41)桜洋一郎、渋谷尚武、八木真介、
横山雄一郎、吉田公平 (S42)加藤邦明、
堤正尚、青木祐二 (S43)石川誠之、大釜寛修、
金子清敏、菊谷清、高橋直樹、藤森英和、
上田俊郎、山口正雄 (S44)小笠原弘三、
佐藤拓哉、水上俊彦、三原健治
(S45)富川正夫、原田博夫、桃谷尚安
(S46)薄木三生、菅原英行、田中康則
(S47)池田重則、園部式正、近田和人
(S48)神山文範、松井一昭 (S49)岡部安水
(S50)男沢弘

以上42名



TUWVOB会 2009年会計報告

(東京口座)

1. 収入

前回から繰越	283,091
OB会費(2人)	2,000
50周年記念残金	112,728
利息	226
計	398,045

2. 支出

会報印刷	5,082
送料	3,420
事務用品、通信他	498
次回繰越	389,045
計	398,045

★★事務局より★★

◇ 正確には分かりませんが、新橋亭での新年会も30年を超えました。取り敢えず30周年ということにしたところ、今年の新年会で、新橋亭さんより参加者の皆さんに記念のお土産をいただきました。



◇ OB会費の徴収は廃止になりました。

昨年お知らせしたとおり、昨年からの会費の徴収は廃止になりました。これまで会費を納入していただいた方々には深く感謝申し上げます。